

業態の確認／喫茶店 その1

～実践税務調査～

税理士 牧野 義博

調査官は、喫茶店の調査を担当することになりました。喫茶店は、申告が適正に行われているか、帳簿を見ても比較対象物がないので、現金業種の中でも特に調査が難しいといわれています。一般的には、コーヒーの粉の仕入れ量から売上を推計することとなります。

調査官は、調査対象の喫茶店がどのような営業を行っているのか、日頃の状況を確認することにしました。平日・休日を問わず、また時間帯を変えながらお店に出向き、テーブルの数や1テーブル当たりの回転数、レジの状況、おしぼりやコーヒーの粉の仕入れ時間帯や仕入先など、時間をかけて地道に確認していきました。古い話で恐縮ですが、映画「マルサの女」で宮本信子がお客の数取りを行っていた場面を思い出してください。

調査官が特に重点を置いたのがレジスターの管理状況でした。最近、混んでいる時間帯では、レジの引出しを開きっぱなしにしてレジを打たず、お釣りを引出しの中からいきなり渡すという光景が多々見受けられました。後でまとめて売上傳票からレジを打つのでしょうか。怪しいですね？



余談ですが、ある調査官が、調査前日の売上傳票とレジのロールペーパーから、レジの打ち直しによる売上除外を見つけたそうです。何で分かったのでしょうか？売上傳票は精算が済んだ順にスタンドに刺していきますので、一番下が最初のお客さんで一番上は最後のお客さんということになります。レジのロールペーパーはどうでしょう。ロールペーパーの一日分は売上傳票の逆で、一番上の印字が最後のお客さんなのです。調査官は、売上傳票の束とレジのロールペーパーの照合を行いました。すると、売上傳票の最初のお客さんがロールペーパーの一番上に印字されているではありませんか。つまり、売上傳票をスタンドから抜いて売上傳票の一部を除外した後、そのまま一番上にある売上傳票から打ち直してしまったのです。物理的に考えても、打ち直ししか考えられません！ 経営者も観念し、売上の除外を認めたそうです。



話を戻します。調査官は、調査対象の喫茶店は終日同じ売上傳票を使用しているか、レジの交替はいつか、特定の時間帯(お客が集中する昼休みなど)のレジはどうしているかなど、毎日細かく念入りに観察を行ったのです。これを業界では「内観調査」といいます。

また、喫茶店を数件ハシゴし、コーヒーの濃さを舌で覚える勉強もしました。コーヒーの粉1kgだとドリップ方式で何杯のコーヒーをいれられるのか。110杯、120杯、130杯？ 行きつけの喫茶店にもご協力いただきました。慣れてくると、ある程度当たるようになるのだそうです。さすが、プロですね。

さあ、下準備が整いました。いよいよお店で調査開始です。調査展開やいかに？

【筆者紹介】 牧野義博(まきの・よしひろ)

東京国税局調査部において特別国税調査官、統括国税調査官、調査開発課長等を経て八王子税務署長を最後に退官。東京都新宿区で税理士登録。著書には「ザ・税務調査1～3」「税務トラブルと債務の確定」(大蔵財務協会)ほか専門誌等に執筆。HPは「牧野義博税理士事務所」で検索。全国各地で講演会も行っている。



法人会は会社経営の効率化のためにe-Taxの普及を支援しています。

さらに詳しくはWEBへ

イータックス

検索